第524号 平成元年 2 月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年 8 月31日 第三種郵便物認可

1989年（平成元年）
2 月号（No. 524）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目　次

針ノ木峠と横地石太郎
安江安宣……（1）
海外の山……（2）
「ランタン・リルン合宿山行」
「IMF 会長サリーンさん」「R・カシン SAC 名誉会員に」
ショートスピーチ
「山の今昔」……（3）
東西南北……（4）
「R・ルディン君からの手紙」
「第 26 回木暮祭報告と 27 回予告」他
自然保護随想……（7）
「登山のマナーについて」
図書紹介……（9）
「薮山辿歴」「アラスカ原野行」
「飛騨の山美濃の山他 1 冊」
「鏡の国のランニング」
報告……（11）
総務・集会・婦懇委，フィルム委，北海道支部
会務報告・ルーム日誌他……（13）
会員名簿の訂正とお詫び……（14）
お知らせ……（14）

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテープ電話 234 六六五九

針ノ木峠と横地石太郎

安江安宣

明治初年の針ノ木峠について記録を調べてみると概ねつぎのような抜き書となる。

(1) 明治四年（一八七一年）英人ダイバースは大町から針ノ木峠を越え立山に登る

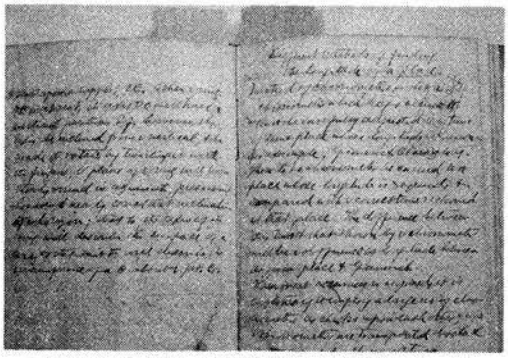
(2) 明治十一年（一八七八年）英公使館書記官サトーは大町から針ノ木峠を越え立山温泉、室堂をへて芦峅に下る。また英人キンチが針ノ木峠に登る

(3) 明治十二年（一八七九年）英人アトキンソンらは八ヶ岳、白山、立山に登り、帰途針ノ木新道をへて大町に出る

〔右の資料は世界山岳百科事典、新稿日本登山史による〕

越中と信州をむすぶこの経路は、戦国の武将佐々成政の故事以来、恐らく無名の人々が数知れずこの難路を利用していたに違いない。ちなみに平ノ渡しには藩政時代黒部奥山を領内にもつ加賀藩の管理小屋さえおかれていた（広瀬誠、昭和五十九年）。

ところで(1)にあげた明治四年ダイバースの件は(2)、(3)にくらべると非常に年代が早い。念のため「資料御雇外国人」をみると彼は明治六年（一八七三年）来朝、工学寮化学教師となり、東大理学部教授をへて明治三十二年（一八九九年）解雇帰国とあるから、明治四年はおかしいことになる。そこで(3)にあげたアトキンソン（東大理学部化学科初代教授）の登山記（日本アジア協会報八巻五六頁）を改めてよく読み年は誤りで、明治十二年夏のことである。



横地石太郎の明治 13 年（1880）東大理学部メンデンホール教授星学ノート（安江蔵）

さて筆者は古文献を渉猟中に明治の初めごろ針ノ木峠 "Alder Pass" を通ったのはこれら御雇外人らのほか自ら針ノ木峠越えを明記した人物が存在することに気がついたので一寸お知らせする。

横地石太郎（一八六〇―一九四四年）は旧加賀藩士で明治十七年東大理学部化学科応用化学専攻を卒業した理学士。彼は東大予備門の学生のとき明治十一年七月に大町から針ノ木越えで富山へ、翌十二年九月には富山からこれと逆コースで大町へ抜け東京に帰学している（学士会月報五〇七号）。

彼の郷里金沢に帰省の折この山旅をえらんだものらしい。その登山服装は浴衣がけに草鞋、腰には日の丸弁当という出で立ちであった（京一中洛北高

なおすと、末尾の討論のなかでダイバースに同行したマーシャルが発言している。彼によればその山行はアトキンソン隊のわずか三週間まえだったことが判明した。つまり明治四

校百年史）。横地によると明治十年の夏、理学部地質学初代教授独人ナウマンは学生中沢岩太（明治十二年化学科卒業、のち工学博士、京大名誉教授）をつれて立山に登り黒部川をわたって針ノ木峠を越え大町に出ている由。この事実も今までの日本登山史にはまったく記載のなかったことである。ナウマンといえば後年日本列島の地質構造に関するフォッサ・マグナの発見（一八八七年）で有名な学者。当時の理学部授業課目をみると中沢、横地とも一年生のときナウマンから地質学の一般講義を聴講していた筈である。

中沢はまた冒頭(3)にしめしたア教授の大廻りの山旅にも工部大学校教授だったW・G・ディクソンと共に終始行をともにしている。ア教授の報告のなかで中沢は明治十年にも立山に登ったことがあると明記しているし、ナウマンの立山における観測にも言及している（日本アジア協会報八巻、山と渓谷五六二号）。したがって横地が指摘した明治十年におけるナウマンの登山は十分な裏付けがあるものといえる。巷間よく間違われるが明治十三年（一八八〇年）に工部大学校お雇教師となったJ・M・ディクソンはW・G・ディクソンの実弟であり、この人は登山とは関係ない。

なお横地石太郎は東大卒業後は教育

海外の山

ランタン・リルン合宿山行

昨年、ネパールのクーンブ山域で学生部員全員参加による「春山合宿」をやり、メラ・ピーク（六六五四㍍）に全員登頂した法政大学山岳部が、今度は七千㍍峰のランタン・リルン（七二四五㍍）での合宿を計画、二月半ばまでに十四人の隊員が相次いで出発した。

十四人の内訳は、OB五人、学生九人。大学山岳部の凋落が言われて久しいが、この大学では中堅、若手のOBが、がっちりと現役を支えているようだ。例えば、ヒマラヤで動ける力をつけるために、国内の主として冬山合宿に力を入れているが、今冬も剣岳・八峰、源治郎尾根、早月尾根を舞台としたトレーニングに八人のOBが参加したという。

一緒に出かけられないOBは、資金カンパをする。昨年のクーンブ合宿も、今回のランタン・リルンも現役学生の負担は、渡航費、装備費など全て含めて十五万円。今時東京にいるだけで一ケ月でそれくらい使ってしまう学生も少なくないから、四月二十日の帰国まで二ケ月あまりの滞在を考えれば、むしろ安い。

ランタン・リルンは、ネパール・ヒマラヤ中央部、ランタン・ヒマールの最高峰。法政大学隊がこの山を目指すのは、クーンブ合宿を終えて次の目標とする「七千㍍峰」を調べた際、たまたまこの山が空いていた、といういきさつによるらしいが、日本のヒマラヤ登攀史で忘れられない山である。

この地域の踏査活動を初めて行なったのは一九四九年のティルマンらであるが、最初に登頂を目指したのは、一九五九年、日本の飯田山岳会隊だった。この時はランタン氷河の偵察をして断念、近くのシャルバチュムに転進（初登頂した）したが、二年後の一九六一年、今度は大阪市大隊が挑戦した。ランタン氷河から主綾線をたどり、六五〇〇㍍地点に達したものの、第三キャンプを雪崩が襲い、森本嘉一隊長以下三人が犠牲となった。日本人のヒマラヤでの初めての遭難である（この登山の経緯は「山岳第五十七年」に広谷光一郎副隊長が詳しく書いている）。

大阪市大隊は、その後も一九六四年に東南稜を試登、ネパールでの登山解禁後の一九七八年秋、ネパールとの合同隊で執念の初登頂をなしとげた。

以後、日本（フリースタイル・クライマー・クラブ、群馬県労山隊、大谷山岳会隊）、イタリア、韓国など各国隊が登頂、八八年冬にはポーランド隊が冬期初登頂を成功させた。

学生たちを中心とした法政大学隊は、雪崩の多発する氷河ルートを避けて、日本の三隊が登頂したと同じ東南稜ルートをオーソドックスな極地法で登る予定だ。三千㍍の固定ロープを用意、初めての七千㍍峰に万全の安全策を講じるという。

部員数十三人。かつての大学山岳部の〝黄金時代〟を考えれば、決して多いとは言えないが、六千㍍を登り、いま七千㍍を目指す若者たちは、幸せな時にいると思う。ステップ・バイ・ステップ。部員の頑張りと、それを支援するOBたちの実りを期待したい。

（江本嘉伸）

界にすすみ大正十三年旧制山口高等商業学校長を最後に退官。趣味が広く几帳面な性格で学生時代からスポーツマンであった。明治十六年六月十六日、東大最初の運動会において走幅飛びで入賞しストレンヂ教授から賞品としてその著書 Outdoor Games, 1883. をもらった（丸善百年史上巻）。この本は現在東京ドームにある野球体育博物館に展示されている。

ショートスピーチ

「山の今昔」

八八年忘年会で織内信彦氏にショートスピーチをお願いしました。ここに掲載するのはそのときのお話です。

（総務・集会・婦懇委員会）

＊

山の今昔という話を、ということですが、お酒を前にした短い時間では無理なので、昔の方だけにして、今の方は、最近出たばかりの「山岳」に江本君が「いま何かが変わりつつある」というベンチャークライミングとでもいったらいいかと思う世界の話を書いているので、それをお読み下さい。

古い話と言えば、私が初めて穂高へ行ったのは昭和二年七月で、秩父宮が登られたのが八月ですから、そのちよ

海外の山

インド登山財団会長 H・C・サリーンさん

一九六八年四月、私は第一回日印合同婦人ヒマラヤ登山隊の一員としてニューデリーに夜着いた。はにかんだインドの隊員たちとにこやかに迎えてくれた紳士その人が、初対面のサリーン会長でした。日本側が自己資金で参加しているので少しでも滞在費を使わなくてよいようにと二名は会長のお宅、もう二名は友人のお宅へとの暖かいお心遣いでした。私にとって、はじめてのインドがサリーンさんのお宅でのインド生活でした。家族そろっての食事は奥様と二人の息子さんです。右手でチャパティやカレーを食べる習慣も、毎日の登山準備も、暑さにも昼寝にも自然にとけこんで、インドが大好きになりました。

この登山隊が、インド登山財団（IMF）のはじめての国際合同登山でした。その後、イギリス、ニュージーランド、アメリカなどとの隊が組まれました。しかし何より多いのは当会を含む日本との隊です。一九七六年、入山禁止の解けたばかりのガルワルに男子によるナンダ・デヴィ縦走隊と、婦人懇談会との第二回目のカメット、アビ・ガミンは皆様もまだご記憶のことと思います。昨年はHAJとの合同でインドの未踏の最高峰リモIが成功しました。

サリーン会長と当会との関係は三田元会長がエベレスト計画で訪印した一九六三年以来です。この二十五年間、どちらかといえば日本から驚くほどの数の登山隊がインドの山へ押しかけ、輝かしい成功もまた不幸も悲劇もあり、ずいぶんご迷惑をかけたことと思います。

サリーンさんは三度、来日しています。初来日は一九七二年で、公務によるものでした。多忙にもかかわらず、デオ・ティバ峰で亡くなったばかりの会員、故井本貴子さんのご両親を訪ね、仏壇の前で手を合わせてお参りして下さった姿を思い出します。山と遭難、生命の尊さというものを常に心に秘めて会長を務められていると感じるのです。一九七四年、インド、ニュージーランド女子合同隊が雪崩で多数の死者を出しました。その山は今でも登山が禁止されています。また当会学生部が希望した山が危険であるとの理由で許可がおりませんでしたが、代わりに目的の山より高峰の許可があったことを覚えています。

未経験であった私が初登頂、無名峰でのシェルパの遭難と、いろいろなことがありましたが、サリーンさんのおかげですべてのことが運んでいったことを、二十年経た今も心から感謝しています。登山を通してインドの山仲間とサリーンさんという立派な人を知ることができました。これも伝統ある日本山岳会のおかげです。会員であるよろこびとサリーン会長を当会の名誉会員にして頂けたことは、私達の第一回合同登山の二十周年の一番のお礼と記念になりました。会の皆様方にお礼申し上げます。

（伏見紀子）

リカルド・カシン SAC名誉会員に

昨年十月、スイス各支部から選ばれた代議員がサン・ガーレンに集い、スイス山岳会年次総会が開かれたが、その席で三人の名誉会員が新たに決り表彰された。二人はスイス人で、一人がイタリアのリカルド・カシンだった。全スイス山岳会で選んだ名誉会員で外国人は、これまでイギリスのハント卿だけだったので、これで外国人

海外の山

っと前でした。徳本峠を越したときに道みち牛の糞が落ちているのをこんなところにどうしてと不思議に思いながら登ったのを覚えています。ところが前穂高から槍へ縦走して徳沢まで下ってくるとそこに牧場があったのでなるほどと思いました。牛番小屋があっただけのとても牧歌的なところでした。

それから毎年のように徳沢へ行くようになりましたが、実はその翌年の昭和三年に烏川から常念岳へ登り蝶ヶ岳へ行く途中で暴風雨にあってしまい、そのまま稜線を行く前途に不安を感じたので、幼稚と言えば幼稚ですけれども早く下へ降りた方がよいだろうと、全然さきの見えないガスに包まれた雪渓を夢中で下りました。谷筋へ出ると水かさの増した奔流がごうごうと音を立てている。なんとそこは一ノ俣谷だったんですね。一ノ俣谷というのは凄い谷でした。岩壁にワイヤーが張ってあったり、丸太棒を一本、足場がわりに岩壁にぶらさげてあるようなところもたくさんありました。

前年に縦走した穂高では、北穂の大キレットあたりでも別に恐怖心は感じなかった。瀧谷を見下ろしながら凄いなあと思ったくらいでしたが、一ノ俣の峡谷にはすっかり度肝をぬかれました。ずっと後に経験した黒部の谷と同じでしたね。最近の一ノ俣谷はどんなところになっているのか知りたいと思います。ようやく槍沢との合流点にある一ノ俣小屋を経て、まる一日ぶりに徳沢の牧場へたどりつきました。めぐらされた牧柵をくぐると、牛の群が点々としており、奥又白の岩壁には残雪が光り、ほんとに心が和む風景なんですね。

ナンガ・パルバットのラキオト谷の森林に囲まれた草原をメルヘン・ヴィーゼだと独逸人が言っていますが、私は徳沢牧場も、そういう言葉は知りませんでしたが、お伽噺の森のように思えてならなかったものです。

残念なことに牧場は昭和九年に廃止になりました。そして徳沢園となるわけですが、創業当初は上條喜藤次さんがやっていました。現在の敏昭君のおぢいさんです。積雪期には最初は源兵、それから茂平、そのあとしばらく西山隠居がわれわれの世話をしてくれました。

徳沢で蛙の味を教えてくれたのは、牧場をやっているころにいた河上という牧夫でした。ボンノムないい男でしたね。皮をむいて清流で洗い、塩焼きにしたり、つけ焼きにしたり、なかなか乙な味のするものです。悪智恵の働いた私の後輩が交尾中の蛙をつかまえてきて、一石二鳥というのはこのことですよなんてすましていたのがいましたがひどい奴です。いまこんなことをやると環境庁の役人に叱られますからどうか気をつけて下さい。

ぼつぼつお酒の用意ができたようなのでこの辺で終ることにしたいと思います。今年は婦人懇談会が印度のシヴァ峰で素晴らしい登山をやってきました。こんないい年を忘年会なんかで忘れてしまわないように、出かけた人も、留守を守った人もみんな、いい思い出として暖めておいて下さるようお願いします。

海外の山

は二人となった。（本会の槇有恒氏はグリンデルワルト支部の名誉会員。共和制のスイスでは各地の支部名誉会員のほうがより親しみをもって地域の人に受け入れられている）

カシンは現在七十九歳で、南イタリアのレッチェに住んでいるが、スイス国境に近いベルゲルを第二の故郷とし、七十八歳のときには、彼が戦前に登攀したバディレ北壁を再登攀している。五十二歳のときにはマッキンリーの南柱状岩壁を登るなど、彼とガッシャーブルムⅣ峰遠征隊でいっしょだった、本会の名誉会員・マライーニ氏も、カシンは今なお元気だと、京都支部の総会のときに話している。

ドロミテのチンネ北壁、ジョラスのウオーカー稜登攀などとともに、彼が伝統的な技術で新しい登攀分野を開いたこと、今なお山岳人との交流を保っている点が評価されたと、その推薦の理由を述べている。

サン・ガーレンでの総会にはSACブレガリア支部長が出席し、カシンの代りにディプロマを受けとった。

カシンは熊のようにゆっくり、そして確実で、踊るように登るコミチやボナッティとは対照的な登り方をする、とは前記マライーニ氏の話である（マライーニ氏の話は京都支部報10号を参考にしました）。〔編集〕

海外の山

東西南北

ローランド・ルディン君からの手紙

日本山岳会の長老、槇サンを先頭に故松方三郎君、田口二郎君等と親交のある山村、グリンデルワルトに住んで昨年末、九十歳のお祝いをしたサムエル・ブラヴァントの近況を僕に知らせてくれたのは、一昨年三月の年度変り

までアイガーやシュレックホルン、ヴェッターホルンの高峰群を展望するには持ってこいの対斜面、フィルストに掛かるチェアーリフト会社社長を務めたローランド・ルディン君です。彼が言うにはブラヴァント君は、おつむはたいへんはっきりしており、視力は非常に弱ったが、ベルン州の運輸大臣やリョッチベルク―シンプロン鉄道の社長の経験を生かして今でも地方紙に論文、随想の寄稿をする由。

次に僕のベルオーナーベルラントの山旅を案内してくれたハンス・ベルネットもグリンデルワルトでは名士の一人。一九二一年には村長を務めた人だが、一昨年の夏、椎間板ヘルニアの手術をし、その後の経過思わしからず入院生活をしている。一九二七年二月には彼、ベルネットとエミール・シュトイリ、浦松佐美太郎の四人のザイルシャフトでフィンステルアールホルン、フィーシェルホルンのスキー行を試みた。

昨年七月には「アイガー北壁登頂五〇周年」のお祝いが行なわれ、初登頂者のヘックマイアー、ハラー両氏が地元の招待で列席した。当日は新聞、ラジオも派手に報道した由。なお、グリンデルワルトとわが信州安曇村とは姉妹村であることは皆さんご存じでしょうが、昨夏の七、八月、グリンデルワルトの旅館（ホテル）、旅籠（パンション）の泊り客数のトップは日本人だということで、いわば彼地は日本ブームというのでしょう。インテルラーケンには日本語学校もある由。JACの大長老、辻村、近藤ご両氏がシュレックホルンクーロワールで雪崩遭難した頃を思うと、泡沫（うたかた）の世の変遷には致し方もなし。アルペンのロマンも消えてゆく。

（麻生武治）

熟年短日低山行

柿原謙一

今年（一九八八）は梅雨どきから複雑怪奇なお天気にいや気、秋の紅葉を狙へば茶色の山にまたいや気。冬木の山をと思っている時、山友からさそいがきた。飯能で合流し、名郷―天狗岩―武川岳―二子山―芦久保駅の日帰りだった。このコースは、記憶では十年ほど前に妻坂峠経由で歩いている。よしとばかり同行したが、記憶に反して意外に時間がかかり、駅にちかづく頃には、昏くなる勿れと疲れた腿をひきずる始末。

帰宅して山行譜をめくる。十六年ぶりの再登山だった。季節も十二月上中旬で、これはほとんど同じである。

前回は名郷―妻坂峠―武川岳―二子山―芦久保駅で、同行は会員望月（達）・山田（亮）さん。所要時間は六時間で小生六十歳。

今回は名郷―天狗岩―武川岳―以下同じで、同行は会員横山（厚）・同夫人・中野（英）さん。所要時間七時間三十五分で小生七十五歳。

名郷部落出発がほとんど同時刻なのに、一時間三十分も多くかかってしまった。

そこで時間比較をすると、休憩時間にはあまり相違はなく、武川岳到着に四十分、武川―二子間に二十分、二子―芦久保間に二十五分ほど、前回より多い。前回は疲労感が全くないのに、今回は武川―二子間の急坂の降登にはこれはどうも、と感じたし、終りに二子の降りで浅間神社小祠からしごかれ、お歳のせいだなを自覚した。車道にでると脚力は回復した。同行諸氏が私の歩調にあわせてくれたご親切には、感謝するばかり。

これが今回の私の熟年短日低山行の始末だが、結論は、二回目だとて軽くみるなよ、十六年もたてば体力脚力が低下してるよ、急降時昏くなる勿れとて五時五分駅到着でよかったよ、などなどの自戒です。

第二六回 木暮理太郎碑前懇親会 報告と次回予告

木暮碑前懇親会はあまり天候に恵まれないようだ。今回も記念山行は雨だった。

五月二十一日夕刻、金山平の碑前祭に集う者五二名。淋しいことは、霧の旅会創立発起人であった山崎金次郎氏の姿が見られなかったことである。例年「来年は来られるかどうかわからない」が口ぐせであったが、それが現実のものとなった。

今回は、木暮友枝さんの姪御さんの山内玲子さんがお見えになったことは特筆にあたいした。碑前祭のメインの記念感話は芳野菊子さんにお願いした。

深田久弥氏が、昭和三十一年七月『ヒマラヤ―山と人―』を中央公論社から上梓した。同書の扉には「私と同様ヒマラヤの経験はなかったが、誰よりも先にヒマラヤに情熱を持たれた故

木暮理太郎氏の霊に捧ぐ」という献辞がしるされている。

昭和三十一年七月十四日、深田氏は夫人と共に、同書を木暮氏の碑前に捧げられた。この席に、芳野さん（当時は大貫姓）は立ちあっておられた。山が好き、山登りが好き、これを結ぶものは教養である。このことに眼を開かせていただいたのが『山の憶ひ出』であると、三十二年前に訪ねた碑（現在地よりはるか高みにあった）の思い出とともに語って下さった。

同夜は、有井館の別館で夜おそくまで盛大な酒宴がもたれた。沢山の差入れがあり、世話人としても有難い極みであった。料理は例により、堀口丈夫君以下、獅々奮迅、山菜づくしで、特に今回はイワナの骨酒が好評であった。

明けて二十二日、小雨そぼふる中の記念山行は、先ず、大尾根越路を越える、比志・海岸寺林道をたどり、海岸寺に至る。百五十体をこえる石仏群に眼をみはり、ついで長駆、甲斐小泉から天女山にあがった。雨やまず、山頂の大あずまやでまたもや酒宴。八ケ岳横断道路を経由して、小渕沢のNHK「武田信玄」のオープン・セットを訪ねる。テレビの画面ではおなじみだが、実物に対面するのは始めてであった。かくて雨中、小渕沢で解散となった。一部は、長坂町の清春白樺美術館にも足をのばした剛の者もあったようだ。

〈参加者〉　赤松光、荒木正弘、荒野康子、池田稔、池田陽子、乾能尚、今井喜美子、岩堀瑞子、遠藤靖彦、岡野修、岡部みち子、落合一雄、笠原忠夫、金山淳二、金子弘枝、川上光久、神田恒子、木村冨久子、河野之保、小塩丘平、後藤典重、小林啓助、小林基子、小林百合、小松崎幸子、込田伸夫、近藤友好、近藤久子、里見清子、篠原健夫、管野久雄、杉本賢治、高田真哉、田村英也、鶴岡元之助、鳥居亮、滑志田隆、平井和雄、広羽清、藤川三郎、藤坂弘、堀口丈夫、前田清子、宮下啓三、森武昭、山内玲子、山村秀子、山村正光、山本麻子、山本稔、芳野菊子、芳野赳夫、以上五二名

（山村正光記）

武田久吉未亡人

小野　幸

本会発起人のお一人であった武田久吉未亡人、直子さんは、去る昭和六十三年六月二十三日、九十一歳で逝かれた。武田先生がなくなられ、十七回忌をおくられて間もなくのことであった。先生がなくなられて間もなく、富士見（千代田区）のお屋敷が人手に渡るかもしれないと聞いた日本建築の故・石原憲治博士（元会員）は「都か区役所で引きとってくれればねえ」と私に話されたことを思い出す。

富士見のお屋敷で未亡人に、最後にお目にかかったのは、杉並善福寺へ移られる年だった。「これからは主人の植木鉢の水やりだけが生きがいです」と元気なお声で言われていた。この後はときどきお電話を申しあげることと賀状のやりとりで終ってしまった。ご遺骨は春にでもなってから武田先生の眠られる日光の墓地（東照宮となり）にまつられるとか聞いている。

（六三・一二・四）

第二七回碑前懇親会は左記要領で行う

日時　五月二〇日（土）午後五時より碑前祭、同六時より懇親会。二一日（日）中央道一宮インターを経て一宮町鈴郷より徒歩一時間にて蜂城山（七三八㍍）登山、釈迦堂遺跡博物館見学、勝沼駅にて解散

場所　山梨県須玉町金山平

宿泊　右同、有井館　TEL. 0551-45-0455

交通　JR中央線韮崎駅下車、バス増富ラジウム温泉行き終点下車、徒歩一時間半、（タクシーの便あり）

会費　一泊二食、山行交通費、記念品共一人、八千円

申込　〒400　甲府市武田三―六―二七　TEL. 0552-51-3175　山村正光

締切　五月一〇日　定員五〇名

三水会、エーデルワイス・クラブ合同第八回現地集会報告

男山・天狗山

日本晴れという言葉そのままの好天に恵まれた山行だった。

十一月十二日信濃川上駅に集合して名老舗白木屋旅館着十七時。

昔ながらのおバアちゃんと久方ぶりの対面。家族ぐるみの素晴らしい接待を受け只々カンゲキ。

翌十三日馬越峠まで宿の車のお世話になり八時発。天狗十時。男山十三時三十分。昼食後下山。晩秋の日脚に合わせるように信濃川上着十六時十分。

独立峰の天狗、男山共に三百六十度の展望は格別。八ヶ岳連峰。奥秩父連山、御座山、浅間。富士も望まれて無風。

特に男山から見る天狗岩峰の絶景。臨幸峠分岐からの岩稜伝いのスリル満点。深田さんの本にも、深田クラブの二百名山にも載っていないのは残念……。

参加者 高田、坂倉、片岡夫人、乾、岡野、川上、田久保、荒木、寺西、林（桂）、田中、遠田夫妻他一〇名

（遠田 栄）

渡辺正臣さんのガイドブック出版 五百万部を祝う会

昨年十一月十五日、麹町の番町グリーンパレスで、渡辺正臣さんのガイドブック出版記念パーティが開かれた。

正確には、一九五四年（昭和二十九年）に初めてガイドブックを書き始めて以来、一昨年（一九八七年）十一月までの三十二年間に三十四冊で合計五百五万三千部を突破した偉業をたたえる会であった。

ガイドブックで紹介した場所は、北アルプス全域、とくに黒部源流、富士山およびその周辺、箱根伊豆、北海道、東海自然歩道などだが、特に富士山をめぐる研究は渡辺さんの終生の仕事となりそうだ。

当日は、渡辺さんの広い交遊を物語るように、山岳会関係、国立公園、自

〔自然保護随想〕

登山のマナーについて

新しい年を迎えて『今年の自然保護運動の中心テーマを考える』というのは、自然保護委員会の主要議題の一つになっている。

昨年末の委員会では、多くの委員から『自然破壊に対する反対運動も重要だが、それ以前の問題として、山岳会会員の自然保護意識を高める必要があるのではないか』という趣旨の意見が出された。

数年前に、会員向けにフィールドマナー・ノートを配布して、登山に必要な最小限度の自然保護マナーを持ってもらおうとしたことがあるが、あまり効果が上がらなかったように思う。会員がノートを肌身離さず持っていて、マナーを守るというのには、登山のベテランすぎた、というべきか。

それならば、どのようにして会員に自然保護思想を普及させるか、というのは大変難しい問題であるが、それはさておき、何故このような意見が出されたかには、それなりの背景がある。

昨年十月末に自然保護委が企画し、集会が協力した『霜のきた尾瀬で自然を語る』山行で起きた出来事だった。すでに尾瀬が原は雪におおわれ、寒かったが美しかったという。鳩待峠からは長蔵小屋の二人が一行二十数人の前と後ろを守って、案内してくれた。

見晴らしに向かって木道を歩いている一行をやり過して、会員の一人が、後ろのほうで湿原にむかって放尿したという。

自然保護に関心のある人なら記憶にあると思うが、この数年、尾瀬はし尿による富栄養化が問題となっている。雪に隠されているとはいえ湿原に放尿する、というのは、自然保護が主催した山行だけに残念だった。

案内をしてくれた小屋の人達に対しても、恥ずかしかったが、自然保護委員にも、いままでの運動が、会員の自然保護意識の向上に役立っていない、という反省材料となった。

いまでこそ偉そうなことをいっているが、数年前までの私だって、自然保護には全く無知であった。平が岳に登ったときのこと、林道の終点から急坂を詰めて、卵石手前の湿原にでて小休止となった。幅五十㌢ほどの踏み跡に足を投げ出し、私を含めて大勢の人が、道端の草の上に腰をおろして憩んだ。

そこに地元の「平が岳の自然を守る会」の人が現われて『草の上に腰を降ろさないで道に坐って』と強い口調で怒られた。いまならば、怒られて当然だった、と納得するけれども、そのときは、そんなに怒鳴らなくってもとムッとしたことを覚えている。

さて、会員への自然保護思想の普及だが、我が身を顧みるとき、大仕事だ、ということだけはわかっている。じっくりと根気よく取り組まなければなるまい。

（関塚貞亨）

次代に残そう美しい山と渓

然保護、ワンゲル、ユースホステル、山小屋、出版およびジャーナリスト、写真家など百六十人あまりが集まり、約二時間にわたって、なごやかに懇談した。

パーティは大森久雄さんの司会で、発起人を代表して織内信彦さんの挨拶、渡辺さん夫妻の媒酌人である劇作家の内村直也さんの、若き日の渡辺さんのエピソードなどの話があり、また、山岳会から渡辺兵力さん、出版関係で実業の日本社役員の勝俣茂幸さんからスピーチがあった。

さらに日地出版出版部長の沼田教子さん、ハイキングクラブ以来の永いつきあいである渡部温子さんらによって花束が贈呈された。また、乾杯の音頭は本会名誉会員の島田巽さんにとっていただいた。

渡辺さんは毎年、その地を訪れ、実際に歩いてガイドブックを改訂する。また、渡辺さんは、読者の電話、手紙による問い合わせには丁寧に返事をするという。余計なことだが、その費用は、いまや印税を上回っているのではないかと、私などは想像している。

挨拶された方々のスピーチも、渡辺さんのガイドの正確さ、誠実さに関するものが多かった。閉会の辞は本会の松丸秀夫さんが述べた。また今西山岳会会長、千家国立公園協会会長ほか多

ゴラパニ峠の想い出

山本　朋三郎

そこに梅花の代りにシャクナゲの花の小枝を差した竹と五葉松の門松があった。日本の正月の門松とそっくりである。何かの祝いらしい。聞けば明後日ヨメさんが来るウレシイ婚礼の門松であった。ヒンズー教徒の多いチタラ部落での風習。

どのようなヨメさんだろうと考えながら山路を登る。雨の山路でほとんどトレッカーにも会わないのに、ヒョッと、曲り角から若い娘さんがビニールの雨衣をかぶって現われる。聞けばシェルパもポーターも連れず、本当に、たった独りでムクチナートへ行くと言う日本娘。ポカラの『スルジュの館』でムクチナートの美しいことを聞いてやって来たのだと言う。シュラフはバッテーに泊るから持っていないと言う。道は人のあとについて行けば迷わないと言う。食事はすべてバッテーで現地食。ネパールは初めてだと言う。十九歳の色白の日本娘さんは奥秩父か尾瀬の山旅と何等異ならない、ムクチナート行きのカリ・ガンダキ遡行である。私にとっては、無用心なその気軽るさに驚く私の方が古くさい時代めいた登山観なのかも知れない。雨の山路を登るビニール雨衣が坂道を曲がるまで、感心してしばらく見送る。

三日前、雨の中をたった独りでムクチナート目指して行った日本娘はどうしたかな。『スルジュの館』はタトパニでネパール娘を見染めてバッテーを開いた平尾氏が、ポカラで再開した旅舎である。以前、氏の商売していたバッテーは家主に返して今は空家。チエックポストの隣り。このタトパニで長い旅のよごれを河原の温泉で落し、下着の洗濯をしていたら、『日本の方ですか？』と鐘馗さんのように顔中ひげだらけで目が笑っている青年に声をかけられる。金髪娘や茶色の胸毛の外国人が海水着姿で温泉に入っているので気付かなかった。三十三歳の彼、独身。会社をやめ退職金をつぎ込んでバングラデッシュ、インド、ネパールの旅で一年がすぎ、二年目に入った、と温泉につかりながら話をする。独身時代にやりたいことをやってから結婚すると言う。大正ひとけたの私には理解しにくい生き方である。雲母を含んだ川砂は、ミルク色にカリ・ガンダキの河水をにごしている。川水で適温にした野天風呂に、ジッとつかって彼の話を聞いていたら、中腰にしゃがんだフンドシの中にキラキラ輝やく川砂がたまる。アルカリ性の水質は、インド製の棒石鹸を良くとかし、川砂にもまれてフンドシが真白くなる。四、五日タトパニに居て、上に行くかゴラパニをもどってアンナプルナの内院に行くか決めると言う。三日前の娘さんに感心させられたが、三十三歳の鐘馗の生き方がうらやましくもなる。

タトパニからゴラパニまで一日行程。大粒のヒョウに降りこめられ、雨宿りしたチトレの最奥の民家へ泊めてもらう。峠までもう民家はない。品の良い八の字の口ひげを生やした六十八歳のプン爺さんは、第二次大戦にイギリスのグルカ兵上等兵としてイタリア戦線へ、同郷の青年七人と共に四年間軍務についていたとのこと。今は年金二四〇〇ルピーをもらっていると言う。彼の長男は今、香港で軍隊勤務中とのこと。山岳戦には世界的に有名なグルカ兵一家である。

大人二人でやっと抱えられるくらいの大木の多いシャクナゲの大原始林で、ゴラパニ峠は紅色の花が美しい。朝早く、ジョムソン基地への交替要員の兵隊が、シャク

数の方々から、祝電、祝辞を頂いた。（関塚）

一ノ倉・尾瀬

川崎精雄

秋晴や尻皮着けて石に坐す
滝沢翳り衝立岩に秋日燦
友墜ちし奥壁黙し落葉舞ふ
岩の間の口つけて飲む秋の水
人去りてケルン残れる磧秋

・

小屋は閉ぢ燧は雲に尾瀬暮秋
戸に番号山荘閉鎖冬に入る
尾瀬守りし三代眠り山眠る
湿原の彼方山影星月夜
峠くだる新雪燧もう見えず

図書紹介

薮山辿歴（やぶやまてんれき）

望月達夫・岡田昭夫著

本書に登場する山の所在と山名、並び

本書はこれらの山にそれぞれルート図と交通手段、所要時間を付記し、訪山への手掛りとしている。

地形図に山名のない山を多数取上げていることとも関係するのだが、著者は古い地誌・郡村誌等を駆使するほか、土地の古老からの聴きとり、営林署・国土地理院への照会等を克明に行ない、その内容は、山名は勿論、街道の変遷、治世、伝承、習俗等にわたり、その労作は評価しよう。

しかし、それが時に煩わしく感じることもまた事実で、この傾向は岡田氏の書いた中に目立つ。すなわち、文献の引用や挿話等すべてを本文の中に取込んで記述していることによる。

これに対し望月氏は、長くなる説明などは本文とは別に活字を小さくする

ゴラパニ峠の想い出

ナゲの花を小粋に胸ポケットに差してゆく。朝ヤケのダウラギリに飛込むように、若い兵隊達は元気に峠をかけおりて行く。ゴラパニから登り一時間程でプンヒルの展望台。朝モヤが上り、太陽が余り高くならない中にスケッチをしないとガスで山は見えなくなる。せいぜい朝の九時までである。ガスの出ない中にと気ぜわしげにプンヒルの登り口をたずねる。

『日本人か？　二郎を知ってるか？』

『何？　ジロウ？』

『二郎は川喜田にきまっている！』

丸顔で五十年輩の六人の中では一番の実力者らしい男が峠の茶店のイスに座っていて話しかける。一九五八年、西北ネパール学術探検隊長としてカンジェロバ・ヒマールで活躍した。現在、日・ネ協会長の川喜田二郎氏のことである。

『知っているのか！　まあ座れ！』

とミルクティーを奥から持って来ると言うのをおさえて、ガスの来ないうちにプンヒルで写真をとりたい旨を告げる。座らせて話し込みたい川喜田二郎氏への懐かしさを押えて『それではガスの上らぬうちに行く方が良い』と言う。写真をとって来てからユックリ彼と話し合う積りでいたので、彼の名前を聞かずじまいに終ったことは、川喜田氏と彼に申しわけないことをした。

三六〇度の眺望で、マナスルから西はチューレンヒマールの山々までの一大パノラマを楽しんで峠を下りると、三日泊りがけでダウラギリとアンナプルナのスケッチに余念のないプロ画家の牧潤一氏の見事な水彩スケッチに見とれて声もない。アマとプロの違いを痛いほど知らされる。自己満足の私のスケッチは絵になっていない。もう一日いると言う牧氏と別れ、静かな山道のガンドルングへの裏道を行く。流石に隊商の馬の群も通らず落葉をふんでの山路はほとんど人に会わない。グルン族の本拠地のガンドルンクへは五時間くらいの山路。アンナプルナ内院から流れるモディ・コーラまで一気に谷を下り、そしてまた下り始めの目の高さくらいまで、またあえぎあえぎ登った所が、ガンドルンクの対岸のランドルング。アンナプルナ南とヒウンチュリが間近く美しく見える所である。こんな静かで美しい山路で、昨日、夫婦の外国人トレッカーが追いハギにケガさせられたことを聞く。ネパールも日本で想像していたのと違う出来事が多い。

（終）

などして記述している。〝辿歴〟（望月氏はこれを一山一山歴訪する意味で使ったと述べている）という書名からして、読者の期待は山に比重が掛っているに違いないのだから、文献等の扱い方は全編を通じて望月氏の方式に統一すべきであったと思う。

しかし、岡田氏が理由があってそうしたのならば、望月氏が一人で書いたまえがきを各々が書き、その中で考え方を述べればよかったと思う。

ともあれ、小粒ながらもアドベンチャー的要素を秘めた山々を、東京から比較的近距離の範囲で紹介してくれる本書は、体力が下り坂にある熟年登山者の歓迎すべき好著といえるだろう。

B6版、二〇三頁、モノクロ写真四葉、定価一五〇〇円、一九八八年七月茗渓堂刊　（山田哲郎）

アラスカ原野行

ジョン・マクフィー著
越智道雄訳

本書の内容は三部から成る。第1部は「アラスカの川めぐり」で、サーモン川やコブツク川をカヌーで下った体験記である。原住民のエスキモー、インディアンのことや、鮭、熊などの生態などを加えて、社会経済的の観察が興味深く述べられている。第2部は「アラスカの州都争い」で一転して、なまぐさい人間の醜い争いを克明な取材で画いている。現在の州都はジュノーであるが、それをアンカレッジ、ラースン・レイク、西部峡谷地帯、ウイロー東方等へ移そうというのである。その賛否両論を暗躍する政治家の人間像を交え人民投票の行方を報じている。第3部は「ザ・カントリー入り」である。アラスカは今まで、広大な凍土地帯に僅かの原住民の住む不毛地帯と思われていた。そこへ白人が入りこむようになったのは、最初が毛皮であり、第二が金鉱で、第三が石油の発見であった。それが一段落して静かになったものと思われたところ、近年になって第四の新しい波「ザ・カントリー入り」が始まった。人々は都会の生活を脱して、原始の生活を求めるため、アラスカに入りはじめたのである。しかしそこで人々は生きて行かねばならぬ。その生き方は千差万別である。その代表的な生き方を、ここに登場する三十七人の詳細な伝記が教えてくれる。いや伝記ばかりでは無い。エピソードあり、人生あり、著者の分析が豊富に物語られる。著者は昭和六年プリンストンに生まれ三十四歳でノンフィクション作家となったが昭和五十二年、四十六歳で本書を刊行した。忽ち全米に絶讃を巻き起し、ベストセラーとなった。それはいつに著者の広汎且つ徹底的な取材の面白さにある。アラスカを知る上には是非とも読まねばならぬ一書である。

一九八八年六月十五日、平河出版社刊、四四三頁、定価二三〇〇円　（河野幾雄）

飛騨の山美濃の山

酒井　昭市著

副題に「無名のやぶ山と山村紀行」とあり、「あの山この山」、「濃飛やぶ山賛歌」、「地図から消えた村」の三章から成る。

本書が対象とする山域は、飛騨の山といっても北アルプスと白山の間に広がる丘陵地帯であり、さらにその南西に広がる奥美濃の山である。この一帯は標高千米をわずかに越える程度の山ばかりで、取り立てて特徴あるピークはない。いわゆるヤブ山の連なりである。それ故に訪れる登山者は少なく、ひっそりと静まりかえっている山域だ。

その山々を故郷に持つ著者が、このヤブ山に限りない慈しみを抱いて、開発に情熱を注ぎ、四季折々の山々のたたずまいと、山麓に暮らす人々のたたずまいと、山麓に暮らす人々のなりわいや山との出会いを綴る。

著者は「誰も顧みることなく消えていく廃村や荒れていく山を……、過疎化がすすむ山村に住む老人の話しを少しでも早く記録にとどめたい」と語る。山々の自然描写を縦糸に、その山人との出会いを横糸として、綾なす山旅を豊かに謳いあげているところに特色がある。それは、著者が三十七年間にもわたった教職から既に退かれていることや、慢性スイ炎のため二度の大手術を経て、現在も闘病生活を続けられていることに無縁ではないだろう。

また著者は、同じヤブ山であっても、「飛騨の山は尾根に踏み跡のある山はほとんどなく、山頂に社や祠を祭る山も非常に少ない。山全体が仕事場ともいえようが、その割にはどの山も人の体臭が稀薄である」と語り、それに比べ「奥美濃の山のよさは、そこに人が住み、生きてかかわっているからこそ、奥深く、味わいも出てくる」と指摘する。事実、山旅の愉しみの一つに、山麓の人々や山仲間との出会いがあるわけで、とりわけ、この地方のあ

りようを識る者にとって、この言葉に共感を覚えるものである。

なお、本書のように一般に知られていない山域を扱う場合、より理解を深める方途として、数葉の概略図を掲げると良かったのではないか。また、本書のような山村風物誌的色合いの強いものでは、その忘れられたように息づく山里とヤブ山賛歌を伝えるような挿画や写真があれば、いっそう味わい深い山書となったのではなかろうか。次の機会に期待したい。

著者は本会会員であり、かつて岐阜県山岳連盟理事長、日山協理事などを務められた。

一九八八年十月、山と渓谷社刊、二三八頁、一三〇〇円　（安藤忠夫）

『足尾山塊の山』『足尾山塊の沢』各一冊

岡田　敏夫著

本書は一冊に纏める予定だったが、ページ数が多いため二冊に分けたもの。内容は日光白根、錫、皇海、袈裟丸、庚申の諸岳を含む東渡良瀬川、西片品川に囲繞された山域の紀行、案内、論説等である。〝日光と尾瀬の人気の蔭にあるこの山域は野性的で標高二千メートル程度なのに静まり返った原生林や時に出会を野生動物に魅力を感じる〟と著者は言う。そして前著『上州武尊山』（昭和六十年刊）に武尊山行二百回を数えた熱心さを、この山域でも遺憾なく発揮し、夥しい山行を重ねている。

第一冊には尾根を主体とした紀行無雪期十八篇、積雪期十五篇を収め、第二冊には実に百三本の大沢小沢の紀行を収める。更に別に日光、奥鬼怒の沢三十三本の紀行を載せる。沢歩きは多くの場合に尾根へ登るから、尾根を歩いた数はずっと多いはずである。

紀行には一篇毎に著者作製の明快なイラストと、要を得た写真（大抵は数枚）が載っているので気持よく読める。特に沢の紀行では飽くまで精密な滝の記号と角度の良い滝の写真が、沢屋たちを惹きつけるに違いない。時間記録も克明である。

文中約百十ページに亘る「足尾山塊の歴史と自然」は著者（日本野鳥の会会員でもある）の動植物、宗教、石仏、寺社などへの興味が示されていてなかなかの力作である。庚申山記、登山史、文献、足尾銅山興廃、動植物など語られていて、登山史には木暮理太郎、藤島敏男両氏の皇海山登高も語られている。袈裟丸山の寝釈迦や相輪塔岩にも言及しているが、土地の古老から聞いた宿坊堂山の石祠を探がしに行き、結局笹の中に発見して石祠の扉の文を解読するに到る一文が面白い。また足尾山塊の集落址をわざわざ訪ねているが、これは人や土地との繋がりを疎かにしない人柄と思える。

巻頭のカラー写真数葉、滝の黒白写真数葉、別葉の地域図、地元の登山関係機関一覧など、紀行と併せ読めば、数少い当地の良きガイドブックでもある。

一九八八年七月、白山書房刊、各冊B6版上製、三八三頁、二〇〇〇円　（川崎精雄）

鏡の国のランニング

江本　嘉伸著

著者の江本氏は毎月この会報の『海外の山』のコラムで、欠かすことなく興味ある記事を書き続けている人。三年前にも多数の文献を駆使して「黄河―源流行」（読売新聞社）という本を出している。今回のはこうした著者のエネルギー源を感じとらせる本ともいえそうなもの。

内容は北極の氷原、アメリカ、中国、ソ連、韓国、日本の雲取山と多方面でランニングを実行した著者の体験がルポルタージュ風に語られている。

ある街中では地図を片手に走り、歩きでは行けないような距離にある地域に入りこみ、そこで真新しい世界に触れる。ランニングは、より広い範囲をカバーし、真実を自分の目で確かめて書くことを仕事とする新聞記者の著者に、欠くことのできない武器となっている。北極の氷原を走って北極点に立とうとするカナダのランニンググループに会った話、レニングラードを走っていて、着ているウエアとシューズを売ってくれないかと若者に話しかけられ、ソ連の物不足の実情に触れる話。最終章『犬と走る』では愛犬の何枚かの写真とともに著者夫妻の犬を通しての交流と、動物への愛情が感じられて、ランニングに対する著者の思い入れの別の面が浮き彫りにされてくる。もしかしてこの著者は愛犬のためにランニングをしているのではないかと。

一九八八年十月、窓社刊、二〇八頁、定価一八〇〇円　（岡沢祐吉）

88年忘年会報告

当夜ショートスピーチをお願いした織内信彦氏の話をテープにとりましたのでご紹介致します（本号三頁に掲載）。

また福引一等賞の里見清子さんに感想文をお願いしましたので次に掲載します。

共催総務・集会・婦懇委

＊

◎忘年会によせて

昭和六十三年の忘年会は十二月十日（土）五時より、総務・集会・婦人懇談会の各委員会共催で、五十八名の会員を迎えてにぎやかに始まった。

毎年ビールパーティと共に、会員間の交流を楽しみにしている人が多く実は、私もその一人です。テーブルの上には係の方達の心のこもった手造りの料理と共にお酒も各種並べてあった。

恒例となった開宴前のひとときを、今回は織内信彦氏の「山の今昔」について昔の方をお聞かせいただいた。まだ上高地に車の入らない頃のこと。徳沢に牧場があって毎年春と秋に牛が徳本峠を越えたこと、一列に並んだ牛が島々谷にかかる丸木橋をどんなふうにして渡ったのだろうかとか、一同笑いのなかにも当時を懐かしむ会員も多かった。

関根吉郎氏の音頭で乾杯のあとは、あちこちに談笑の輪が広がって、可愛らしい竹串に指した色とりどりのおつまみがお酒の友達になって、飲み放題・食べ放題の会は、珍らしい料理が次々と運ばれてきて、宴の盛り上がった頃には待望の福引き抽選会となった。

空くじなしの福引きは一等賞の人が、今回の報告文を書くことになっている。一瞬グラスも口元を離れて前方に注目した時であった。日頃からなぜかくじに弱い私に一等が当たって驚いた。賞品の強力ライトが明るく幸運の光を与えてくれたが原稿はちょっと重荷。

続いての楽しみは勝田さんの手品だった。名人芸の手品はまず、手に持っていた千円札が一万円札になったかと思うと、何枚かの白い紙は全部お札に変わってしまった。そのあざやかな手さばきは見事なものだった。

講演会「映像の変遷」

フィルム委員会

「映像の変遷」と題して、川合周会員（元NHKディレクター）およびNHKチーフカメラマン蕗谷龍夫氏による講演会が十月二十五日、本会集会室で開催された。

当日は会場にそれぞれ時代を代表するテレビ撮影用カメラ（フィルム用）―アリフレックス、ベルハウエル・フィルモ、8ミリビデオカメラの三種―を持参いただき、そしてテレビで放映された山岳映像を写しながら、テレビによる山岳映像の歩みについて両氏からお話があった。

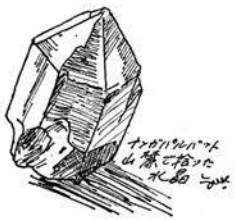
テレビで放映された山岳の映像として、NHKが昭和五十二年制作した「谷川岳」と、テレビ朝日が昨年放映したチョ・オユー登山隊の記録が写された。前者はテレビ中継車を使ってのテレビカメラ中継録画方式の山の番組としては初めてのもので、一の倉沢出合いのカメラと岩壁基部のテラスに上げたカメラにより、衝立岩を登るクライマーを追った映像は当時としては画期的なものであった。後者は小型ビデオカメラによる最新の映像で、八千㍍の頂上からパラグライダーで降りた高橋和之氏らの頂上での様子がリアルに描かれている。

この二つの映像が作られた時間的間隔はわずか十年余にすぎないが、その間に映像を伝える手段は大きく変わった。両氏のお話からそれを要約すると―

「谷川岳」でテラスに上げたテレビカメラは、望遠レンズを付けると長さ五〇～六〇㌢もあり、狭い岩場での撮影は大変な作業であった。映像を電波で出合いの中継車に送るという中継方式により、フィルムカメラとは比較にならない鮮明な映像とリアルな音声が収録され、きびしい谷川岳の様相がまざまざと茶の間にとどけられた。その後、トランジスタの使用でテレビカメラも小型になり、さらにはビデオの時代になった。NHKでは三年前からフィルムによる映像はなくなっている。電子映像のテレビカメラによる生中継と、フィルムカメラによる録画方式でスタートした山岳映像は、今や同じカメラで中継も録画もできるようになった。昔のテレビカメラは操作に職人的な勘が必要とされ、技術的に難しかったが、今のビデオカメラはピントも露出も機械がやってくれるのでカメラマンがいなくても写るようになった。フレームワークだけやればよいので、登山家の手で山の映像を撮ることができ、しかも小型・軽量化されたので、八千㍍の高度に、無酸素でもカメラを上げることができるようになった。しかも、通信衛星の出現により、昨年のチョモランマ山頂中継放送のように、世界中のいかなる山からも中継放送が可能になった。これらの大変革の背景には総合的な科学力の発展がある。とめどもなく伸びていく科学技術により、今後どんな映像が可能になるのか楽しみである。

（南川金一）

歓談はなごやかに続き、名残り惜しいところだが、また来年の計画に楽しみを求めて七時半にひとまずおひらきとなりそれぞれ家路へと急ぐのだった。（終）



北海道支部忘年会

北海道支部忘年会は、十二月九日（金）午後六時より、札幌駅前通り雪印パーラー三階会議室で開催、橋本支部長初め三十三名出席で盛大に行なわれた。

先ず橋本支部長の挨拶、朝比奈先生の音頭で乾盃。今年から駅前通もホワイトイルミネーションに輝く様を眼下に見下しながらの宴は、大雪の集いや、岩内観月会、河村会員お別れ山行袴腰山等の行事を振り返り話題が弾む。

続いて恒例の一言メッセージは、柳田集会担当委員の司会で、拍手、爆笑、素晴しいと様々な批評が交錯する。

二次会は、例によって『つる』が、満員のため『アンナ』へ、ウォッカに力付けられ再度『つる』へ、そしてY会員宅で、締め括る。冬の夜のサッポロでの山岳会員の楽しき一夜の宴であった。

出席者氏名 浅利欣吉、橋本誠二、柳田涼子、山川力、佐々木喜一、藤野和男、岩佐敏彦、本多矩、上島忠義、井後幸太郎、米村清一、岸恒方、朝比奈英三、小林年、栗村明信、小須田喜夫、澤田良子、野田四郎、金井哲夫、亀井秀子、川越晧充、向井成司、阿部淳、河村皆子、佐々木孝雄、大久保五郎、芳賀孝郎、藤井かおり、植田惇慈、沼崎勝洋、高橋国臣、新妻徹、平野明〈順不同〉

（平野　明）

会務報告

十二月理事会

十二月七日午後六時三十分
場所　本会ルーム

出席者　今西会長、大塚、村木両副会長、西村、鈴木、橋本、大橋、関塚、太田、織田沢、大森、浜口、早坂、小林、岡沢、新井各理事。小倉、山野井各評議員

委任　松永、田部井、勝山各理事。太田監事

報告事項

●会長…チョモランマ、マナスルの登頂記念品等を本会に提供した。

●図書…「第十七回山岳史懇談会」講師渡辺兵力氏、「第二十回山岳図書を語る夕べ」講師島田巽氏、田口二郎氏の予定。

●自然保護…奥武蔵日溜り山行の予定について、「屋久島ロープウェイ計画」に対する要望書が自然保護協会より環境庁に提出された。

●山日記…山日記完成の報告。

●山岳…山岳六十三年度版完成の報告。「山岳総索引」出版予定について。

●科学…講演会「チョモランマ峰の気象予報」開催について。

●医療…講演会「トレーニング効果と健康維持」開催について。

●学生部指導…クスム・カングル峰遠征について。

●指導…日韓交流登山実施報告、「スキー講習会」開催予定について（共催婦人懇）。

●財務…予算編成のため事業計画準備のお願い。

●海外…「チャクラギール峰登頂報告会」実施報告、「北極点徒歩探検国際隊」協賛について。

●三国登山…報告書編集状況について、「ナムチェバルワ峰」登山許可申請について。

●集会…現地集会「四阿山」実施報告、「権現山」開催予定について。

以上

ルーム目録（12月）

3日　支部長会議
7日　理事会
8日　資料委員会、婦懇
9日　「チョモランマ登頂時の気象」講演会
10日　忘年会
13日　科学委員会
14日　学生部忘年会
15日　図書委、フィルム委
19日　総務委員会
20日　自然保護委員会
21日　三水会忘年会
22日　常務理事会

12月来室者379名

会員異動　12月

退会
葛山元義（八八三〇）
綾戸　皎（七八一九）
豊島　卓（九一八六）
物故
反田邦治（九二二九）12月連絡
氏名変更
牧谷　昇→直井　昇

会員名簿の訂正とお詫び

1988 年版の会員名簿編集に際し，プログラムで支部コードより支部名を印刷する際，右記の山陰支部所属会員 28 名のコードを誤って，関西支部とする様に指示してしまいました。そのため山陰支部所属の 28 名の方々の支部名が，すべて関西支部と誤って標記されてしまいました。

ここにお詫びして訂正させて戴きますのでお手数ですが，お手許の会員名簿を訂正下さる様お願い致します。

その他に会員番号 5465 番の長田（オサダ）義則氏のフリガナがナガタとなっていたため，本来 45 ページのところに入るべきところ，122 ページのナ行のところに入っておりました。また会員番号 5776 番小林俊樹氏の住所は長野県南佐久郡小海町豊里ニタ小池 865 です。併せて訂正方お願い致します。

（松田雄一）

頁	行	会員番号	氏名
28	上 9	6635	井上豊重
42	下 7	3853	岡村一郎
45	下 7	4852	小椋凱夫
49	下10	9726	影山収
60	下 8	7034	吉川暢一
70	下10	7063	小西毅
80	下12	7835	佐藤衛士
85	下12	6637	篠原千秋
86	上 7	6667	柴田嘉彦
88	上12	8228	白根一
90	上12	6668	菅原篤則
98	上 8	5404	高田允克
105	上 1	6532	田中潤一
106	上10	6641	谷野彪
113	上 1	10284	徳田章人
116	上13	9772	中井俊一
121	下 1	9724	長田健三
134	下 9	6531	林原健蔵
135	下 3	6610	盤指敏詮
136	下10	9725	飛田彰
138	下10	6416	廣江研
140	上13	6612	福嶋泰夫
140	上14	10269	福嶋佑二
157	下12	2458	港叶
169	下10	9805	藪内卓男
170	上 4	6609	山岡健志
172	上 5	9962	山下俊一
174	下10	6639	山本卓雄

所属支部は全て山陰に訂正

お知らせ……

⊙講演会

「日常のトレーニング効果から、高山病の予防まで」

あなたはいつも健康維持のために、トレーニングをしていますか。それとも山行前にのみですか。

充分にトレーニングを積んでの山行と、忙しくてトレーニングをせず山行した時の体調の違いは、既に多くの人が経験しているところです。

今回は「日常のトレーニング効果から、高山病の予防まで」と言う内容で講演会を企画しました。講師は、自らヒマラヤに出かける、その道の専門家ですので、たいへん有意義なお話が聞かれます。会員皆様のご参加をお願い

します。

講師 浅野勝巳先生
筑波大学体育系運動生理学

日時 三月十日（金）十九時

場所 日本山岳会ルーム

会費 五〇〇円

＊

医療・集会委員会

⊙新入会員オリエンテーション

第十五回オリエンテーションを左記の通り開催致します。六十三年度入会の方を対象としておりますが、六十三年度以前に入会された方も事務局までお申し込みの上ご参加下さい。（新入会員の方へは往復葉書で申し込み書をお送りします）

記

日時 三月十一日（土）十四時より
懇親会 十七時より

会費 無料

場所 日本山岳会集会室

＊

総務委員会

⊙女性会員懇親山行

古くから歌に詠まれ、薬草や高山植物の宝庫でもある『伊吹山』において懇親山行を計画いたしました。会員の皆様の多数のご参加をお待ちいたしております。【男性会員の参加も歓迎】

期日 四月十五日（土）十六日（日）

集合 A＝JR米原駅東口十五日正午
B＝米原駅東口十五日午後五時

日程 十五日・〔A〕長浜曳山まつり見物〔AB共〕夕刻より懇親会
十六日・伊吹山懇親登山、米原駅にて解散。（午後4時頃の予定）

費用 約一万二千円（宿泊・交通費）

申込先 **婦人懇談会**・山岳会事務局
（〇三）二六一―四四三三
関西支部・水谷眞砂子
（〇六）四四四―三二六九
京都支部・伏見紀子
（〇七七五）四三―一一〇三

締切 三月十五日（水）

※詳細については後日、参加申込者にご連絡いたします。

婦人懇談会・関西支部・京都支部共催

＊

⊙図書委員会の催し二つ

●第一七回山岳史懇談会

テーマ 谷川岳東面の開拓とクラブヒュッテについて

講師 渡辺 兵力氏

日時 三月十七日（金）
十八時三十分

場所 日本山岳会ルーム

●第二〇回山岳図書を語る夕べ

テーマ 松方三郎の山と本

講師 島田巽氏・田口二郎氏

日時 四月八日（土）
十五時

場所 日本山岳会ルーム

＊

図書委員会

⊙イタリア山岳会杯 第九回ヴァルフルヴァ国際山岳スキー・ラリー

「イタリア山岳会ヴァルフルヴァ支部主催、第九回イタリア山岳会杯、ヴァルフルヴァ国際山岳スキー・ラリーを一九八九年五月七日に、トレセロ峰（三六〇二㍍）地域―オルトレス、チェヴェダーレ、ハイ・ヴァレンチン渓谷―にて開催致します。

貴チームのご参加をお待ちしています。近日中に、規約並に様式をお送り致します。

イタリア山岳会支部長
ルチアーノ・ベルトリーナ」

興味のある方は、海外委員会にご連絡下さい。

海外委員会

あとがき 長いあいだ「山をきれいにゴミは持ち帰ろう」という標語がこの会報に、それも一面に載っていた。

▼このことにクレームをつけた、ある会員は、一般の登山者を対象とした雑誌ならいざ知らず、本会の会報に載せてこれを会員に訴えるのは当らないという。

▼地域の自然保護や、そういったものを通して子供たちの情操教育を計っているその会員にしてみれば、この標語は屈辱的であったに違いない。

▼今回の自然保護随想には、そういった会員の気持を逆なでするような出来事が語られている。

▼海外の山々に遠征していく貴方は、どう廃棄物を処理するのか？

▼タバコ好きの貴方は、山で吸ったタバコの吸殻を、はたして下界まで持ち帰っているのであろうか？ （O）

平成元年二月二十日
102 東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 今西寿雄
編集代表 岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座 東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一―三―六
赤坂グレースビル
印刷所 株式会社 技報堂